



## 予測不能な事態への対応が問われるとき

### ～新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対応について～

今回の通信は、写真もなく文字数も多く、読み辛いものとなっています。しかし、お子様の安全に関わる重要なものです。裏面も含めて最後までお読みいただけるようお願いします。

#### 【学校での対応】

- ① 石鹼やアルコール消毒液などを利用して丁寧な手洗いをこまめにする。
- ② せきエチケットを習慣化する。  
※せきやくしゃみはハンカチやティッシュで押さえ、とっさの時は、上着の内側や袖で覆う。  
※せきやくしゃみが出る時、他人に移さないためにはマスクは有効であり、可能な限り活用する。
- ③ 給食は向き合って食べない。
- ④ 近距離で話し合いをするようなグループ活動はしない。
- ⑤ 体育館での卒業行事関係は換気を頻繁に行い、原則マスク着用とする。  
※マスクは色や絵のついているものも許可しています。  
※入手困難なマスクを早朝から薬局に並び、提供していただいた保護者の方に感謝します。
- ⑥ 多くの児童・教職員が触れる箇所の消毒を行う。
- ⑦ 「温かい心、科学的な考え方、理性的な判断力を育てる学びの機会」を設け、人権について考え、風評被害、いじめ、偏見や差別が起きないようにする。  
※本日、全校児童に対し、放送による校長の話に引き続き、各学級において指導を行いました。

#### 【家庭での対応】

- ① 登校前に検温をお願いします。  
※発熱等の風邪の症状が見られるときや倦怠感が続くなどの体調不良の場合は、「自宅休養」をする。  
※自宅休養中も、毎日、体温を測定して記録する。
- ② 休日等に人混みの多い場所への外出は避けてください。
- ③ 外出時のマスクの着用、消毒、手洗い、うがいを徹底してください。

#### 【校長からのメッセージ】

今回の新型コロナウイルス感染症は、まさに予測不能な事態です。現段階で目の前に明確な答えはありません。これまでの行政や医療機関の対応に対し、批判が毎日のように報道されています。

「予測不能な未来を乗り切るために…」と、旗を振っている我々大人たちが、あたふたしているこの状況を見て、子供たちはどう感じているのでしょうか。今回の対応は、全ての大人に出された大きな宿題とも言えます。これを機会に、ご家庭でも今回の事態をどう乗り切るか、行政や医療機関の対応はどうあるべきか、万が一感染したらどうするかなど話し合ってみてください。

学校では、子供たちが安心して授業に臨むことができるよう、全力を尽くします。冷静に対策を講じながら、この事態を乗り切る答えを見つけていきます。

今後、学校行事、部活動等で急な変更もあるかもしれません。ご理解・ご協力をお願いします。

●裏面：第33回「全国中学生人権作文コンテスト」内閣総理大臣賞受賞作品『それでも僕は桃を買う』

## 「それでも僕は桃を買う」

内閣総理大臣賞

宮城県古川黎明中学校3年 大沼逸美（おおぬまいみ）

夏休みのある日、僕は、家族といっしょに旅行することになり、一路、新潟を目ざして車に乗っていた。朝早く家を出発し、東北自動車道から磐越自動車道に入り、サービスエリアで休憩をとった。サービスエリアの売店にはたくさんのお土産が売られていた。その中に、福島県特産の桃が並んでいた。その桃を見て、無邪気な子どもが母親に「桃食べたい。」とせがんでいた。しかし、その子どもの母親は「だめ。」と子どもに言い聞かせようとする。子どもも引かず「なんで。」と反論する。すると、母親は「だって、この桃、福島産だよ。放射性物質っていう良くない物がついてるかもしれないからね。」と説きふせたのだ。しゅしゅ諦めた子どもの姿を見ながら、僕は、心の中に何かひっかかりを感じていた。

車に戻り、走り始めた車の中で、僕は両親にさっきの出来事を話した。父は「やっぱり放射性物質がついていないとは言い切れないからな。」と言い、母も「確かに心配ではあるね。」と言った。これまでの自分を振り返ってみると、僕も同じようなことをしていたことを思い出した。僕の住んでいる地域のスーパーマーケットでも、「福島産」と表記されていると、どうしても避けてしまうことがあった。しっかり検査を受けて市場にでていると分かっている、なんとなく不安だったからだ。サービスエリアの出来事にひっかかりを感じてはいたが、僕はそのことを忘れようと思った。しかし、僕の頭から、「だって福島産だよ」という言葉が離れることはなかった。なぜ、そんなにも、その言葉が気になるのか、僕は、旅行中、ずっと考え続けていた。そして、思い当たった。僕が小学五年生の時に友達から言われた、あの言葉と同じ、嫌な響きを感じたからだ。

小学五年生の時、僕は仲のよかった友達と大げんかした。理由はささいなことだったが、言い合いはとまらなくなり、とうとう互いに相手を罵倒するようになった。その時、最後に友達が僕にこう言ったのだ。「黙れ。中国人。」僕は中国生まれの日本育ちだ。日本に来てからずっと、自分が中国国籍であることを表に出して生活してきた。そのことに対して、友達の誰も触れることはなく、僕も中国国籍であることを気に留めることはなかった。

しかし、あの時、その友達の言葉は、鋭利な刃物となって僕の心に突き刺さった。そして、自分は他のみんなと違うんだと切なくなってきた。仲の良かった友達が、心の中では僕を差別していたんだと感じ、悔しくてしかたがなかったのだ。幸い、友達とは仲直りすることができたが、しばらく、あの友達の放った言葉は、僕の胸をひっかき続け、嫌な響きとなって耳の奥に残っていた。その嫌な響きと同じものを、「だって福島産だよ」という言葉に僕は感じたのだ。僕の場合は、中国という国のことを知りもしないのにばかにされ、福島の桃は、放射性物質のことをあまり知らないのに、危ないと決めつけられ、自分と桃が重なって見えたのだ。風評被害という言葉は知っていたが、この時、僕は、福島の桃は、被害ではなく、「差別されているのだ」とはっきりと感じた。

だから、僕は、桃を買うことにした。僕は差別される側の気持ちを知っている。それなのに、その僕が、知らず知らずのうちに、他の人と同じように福島県産の桃に偏見をもち、差別していた。それは、桃だけにとどまらず、福島の人々を差別していることにもなるのだと気づき、これではいけないと思ったからだ。新潟からの帰り道、僕は、磐越自動車道のサービスエリアで、桃を買った。それは、もう偏見をもたない、差別などしないという、小さいけれど大きな僕の決意でもあった。

二十一世紀の今、日本そして世界中のあちこちで、いまだに多くの偏見や差別が残っている。生まれた地域や肌の色、病気、そして、福島原子力発電所のように事故に関係するものなど様々だ。それらの偏見や差別の根本にあるのは、何なのだろう。僕は、警戒心ではないかと思う。よく分からないから、見えないから怖く疎ましく、自分から遠ざけようとする。その気持ちだが、偏見や差別を生むのだ。

では、どうすれば、私達は警戒心をもたず、この世界から、偏見や差別をなくすことができるのだろうか。その鍵は、二つあると僕は考える。一つは、他の人のことをよく知ろうとする姿勢。もう一つは、他の人の気持ちを思いやる想像力。この二つが、未知のものへの警戒心を取り去ってくれる。

偏見や差別を、この世界からなくすことは本当に難しいかもしれない。けれども、二つの国の良さを知っている僕は、相手を知ろうとする姿勢と思いやる想像力をもち、周囲の人に接していこうと思う。いつかきっと、お互いを慈しみ合う世界になることを信じて。